

花の食事

特115
893



古家筆子遺稿



始



花の食事

115

893



古家筆子遺稿

8115
893



— 像の子筆 —

花の食事

古家筆子遺稿

大正十五年秋

大正
15.12.24
内交

わが靈魂は渴けるがごとく神を
したふ

（第四十二篇二節）

ひなげし

母のおもひは
そのかみの
さほきおさめの
夢にこそ
夕べ眞赤き夕やけに
ほろ、散りゆくひなげしの
はかなけれどももえされる
かゝるさきしもそのかみの
さほき
おさめの夢にこそ

筆子

目次

筆子の像	下村泰一氏撮影
菊	筆子畫
歌集		
花の食事	一
しろき靴下	一七
なもなき花	四七
搖藍	五五
送風機	七一
はこね路	八三
瑠璃色の花	九三
日記——抜粹——	一〇九

古家筆子略年譜 一三五
筆子さんの臨終 小村直氏 一三九
巻末に 古家 新 一四五



— 畫 子 筆 —

歌

集



之
室に浴みせすの
たきこゑ
こたまとたうて
畫軒のたうて。

大きな緋鯉のねえ
みかけ
あまハ重梅 今さかのたうて。

花
の
食
事

大正十四年三月
より十五年十月
まで北原梅田にて

うつくしく吾子わがこがつくりし飯事まじごの花の食事まじごにわれもたぬしむ

石のへにならべし吾子わがこの御馳走ごちそうのあまりにおほく食べ切れずおもふ

小さきびんに花なごさして病む母に見よといひてし吾子わがこなりしかな

やむことを聖旨みたまごとつよくあきらめて生きなんとしてなやみはふかし

窓ごしに雲のゆききを愛することになれてひさしく病はいえず

いとせめて母のそばにて飯はまんと箸などをもちて節子はきたる

さびしからん父と子がはむ夕食をねやにてきけば、なかれぬるかな

やうやうにきりたるつばさのびそろひ五月の空に鳩はあそべり

ひごごふる雨をうごみて巢にこもる鳩はもなかず吾も病みてあり

クリスマスまちかとなりて煙突のあまりほそきをきづかへる吾子

しのびあし、「サンタクロスのあし音よ」と、わが節子らのこのごろの遊戯

すばらしきプレゼントなど考へりうまいせる子のかたわらにして

子をねかししみじみひたる冬の夜の溶漚のなかにひいをいたはる

子をねかししづかなる夜を溶漚のなかにしてきく葉のおちるおと

おちなんとして、わがひたりゐる溶漚の窓にかゝれる冬の夜のつき

さんさんご水雨ふるひはわが小鳥かさなりあひて外面をながむ

ひねもすを水雨ふるらんおしだまかさなり合ひて小鳥はなかす

年の瀬を病みこやりをれば家々に煤掃ふらしきけはひのきこの

病みこやりまたきたるべき元旦もこのねやぬちに迎へるらんか

被布のひもつけやらんなごおもふこと久しうなるに未だし病めり

わがやみて久しきゆえに吾子の爪いたくものびてごみのたまれり

ひいれして爪の伸びたる吾子の手を握りてしばし言葉もいはず

去年のはるまたこの春もねやぬちに初日をあびて心たらひぬ

天つ日のおほらけき光病む身にもこゝろゆたかに春を迎へぬ

世のつねの母のごとくにわれもまた節子に晴れ着させやるらんか

追ひ羽根によねんなき子のごきごきにかへりきて問ふ母の病を

追ひ羽根によねんあらすなねやぬちにこもりゐて母のねがふことこれ

やみこやりひさにいだけばわが節子はるかに重く抱きあへぬかな

病むことになれしと笑めごよるべなく頬につたふは何の涙ぞ

ゆびやみて久しき夫の茶碗などあらへるをこのねやぬちにきく

子をねかし茶碗洗ふらしわが夫のくりやにいでゝ水くむきこゆ

いとけなき子をあつめ來てよねんなくらかんをまはすわれの新春

蜜柑のかずふゆるうれしき雙六たごによねんなき心ながくもつづけ

とゝせへぬわが初戀もやうやくにむかしがたりとなりてさびしき

誰やらんひそかに人を戀ふごときなやましさをぞけふもおぼゆる

われにたゞひとり友ありその友の未だ嫁よめがぬをかなしくおもふ

おほらけき天つ日の下おさなご遊びてあれば心たらひし

—五首の雑句にて

この命すぐのびよかしとおもひつゝ砂いちる子のかたわらにゐし

ひさにきて子らとあそべばわがこゝろぬぐはれしごと病わすれぬ

あかあかと椿はさけりそのあたり子らと遊べばよねんはわかす

つゝいづゝ子らとめぐりてよねんなく鬼ごつこなどしたり新春

しどやふる雨にしぞぬれて猫よ汝もさびしからまし山茶花ちるに

部屋ぬちに氷ははれど窓ちかき山ふところはかすみたちたり

産室に浴みする子のなきごゑのこだまとなりて晝しづかなり

—八首の雑句にて—

大きな鯉はねとびみぎわなるおそ八重ざくらいまさかりなり

隣室の患者のごもけふもきぬわれはむなしく吾子まぢくれたり

ときどきに犬のたわむる氣はひして病院に春のひはかゞやけり

なすことをもたねばけふもむく犬のたわむれをよしとめでゝ過せし

なにかなしおちつかぬこゝろ病院のながき廊下をゆきてはかへる

お見舞の菓子をはゞばりかへりゆく午後の廊下に吾子の小さき

退院の明日にせまりてトランクに着物をつめるわがこゝろなり

しろき靴下

大正十二年六月
二十三日
まて 宣 宣 宣 宣
に て

あさと出の君をおくりてこゝろ憂しほころびゐたるしろき靴下くつした

冬仕度やうやうおへてひさびさにこゝろ静かに落葉をきけり

たちならぶ櫻の木々にひとしぐれすぎて紅葉の散るをめでにき

ゆき逢へる人ふりかへりあまたゝび愛まなしき子よと吾子わがこをめでゆく
一 二三四五六七八九十

愛ぐし子と人らほむれば歩みつゝもほゝえまれけりわれは母親

日の皇子のかへります日を海の色あをあをとして秋晴れにけり

一 二首皇太子陛下を詠言して一

秋風に皇子の御旗のひるがへる仰ぎつゝ涙とよめあへぬも

わかゝりし母の姿のうかびきぬ茅花などわがしがみてあれば

機ををるたらちねのそばにおこなしくつばなをはみて遊びし子なり

はりものにうみて仰げば梅雨ばれの空にほのかなるひるの月みゆ

これやこのゆめかうつゝか音羽屋が二八娘となりて舞ふとき

一 三首皇太子陛下を詠言して一

ゆめならでかくうるはしきうつしよのありとはいまだしらざりさわれば

美とゆめのゆたにどけあふ春の日のいでゆに近きさびし劇場

戀ごゝろわれにゆるせとひなげしの花にわがひしそのかみのわれ

いまはたゞ夢のごとくにおもほゆる罌粟の畑に狂ひしこゝろ

つとふればなみだのごとく地におちし罌粟の花きみが初戀

いつしんに罌粟の花さき咲けり、世のおごめみなくなるへよ戀に

針もてば胸のいたむをしみじみと覺ゆる日なり日向雨ふる

野の子らさしばしはわれも吹きにけり吾子草笛をせちにせがめば

草笛におさなき夢のかへりきてわれの母なるをわすれたりしばし

陽てりたらふ七月の野に里の子と草笛を吹けばよねんはわかす

村の子らみななつきけりこの日ごろわれもまじりて草笛吹けば

いと古くさびし吸入器にそのかみの父の面影のおもほゆるかな

―四首文を思ひて―

こどもゆえまづしきゆえに教員をやめることもできず父は病みたり

河骨の咲く池のべにゆきかへり息せまり来といこへり父は

としどしに河骨さけり父おもふこゝろも深み吾も病みてをり

病、病、いえなくてまた七月もすぎなんとしつ蟬もふえたり

ふり返れば手をあげて門に立ちつくす子をいとほしみつ病院へ行く

おとなしくまつらんものと人力車とやめて買へり首振人形

いさゝかも熱は下らす真晝まをじいじいと蟬のなきやまぬさびし

こもごもに浴みする鳥をめぐらかにみつゝ忘れき病むてふことを

しばらくは病わすれんと里の子をよびて蓄音器ならしてみしが

このまゝにいゆることもなく夏もさり秋冬さるとおもへばさびし

法師蟬しきりになければときすてし秋の衣のこゝろにかゝる

こもりゐてわづかにつたふ風の香に秋をしゝればなみだひまなし

いつにならばわがこのもしき衣きてはればれと電車にのれることかや

病いえなば小鳥のごとく暗れやかに咽はんなどけふもおもひぬ

① つたりとよるささの毒に毒せんかくおもひつゝ秋もたちたり

いとながきこの家のうちの憂鬱も病いえなば消えなんものを

ちからいつばいさげんでみやうかそうしたらこんな熱ぐらゐなくなるだらうに

おのづから熱くなる眼をじつとち荒骨高き胸に手をくみてみる

うちならず盃盃の鐘そのまゝにわれに手向けらる心地こそすれ

あはれ吾子母やめばとて一日中おとなしくせよときかされてゐる

むさし野に四ツ葉クローバさがせりと年わかき人の文なつかしき

弱けれどかくものびたる藤のつるある日はおもふわれに似たりと

しやにむにのびたるつるをけふきらん明日はとおもひ秋も立ちたり

かさなりて緑もる日光のいみぢきにきりあへなくてのびも伸びたり

手も足も流れゆくごとし痛みあがり日だまりにゐてこゝろたらへり

このまゝに死んでゆくのではないかしらかくおもふ日はものをもいはず

血のすじのあらはになりて八月も暮れんとすなりやめばうとまし

熱たかき午後はみどりの母にさへうとまし顔にものをもいはず

いましてがた叱られし子は歌うたへり、しづ心なし叱りし母は

なよなよし母にたれごめぐし子にかゝる病のありなましゆめ

そのあまりおほきなるはな日向葵の太陽にはむかへど燃ゆるをしらす

さびしきはかの熊本の豆粉賣りきやはんのひものどけてゐたりし

熊本の豆の粉賣りもこのごろはかへりしならん法師蟬なく

のぼりきてつかれたりけり高原にげんのしようこの花をいとしむ

雨晴れて湯のまちの屋根はかやけり露臺にいで、秋をたのしむ

湯のまちの病院の屋根まつ赤なりかたむきし陽をまごもにうけて

陽にてらひ棕櫚のかそけくふるへるを秋風とこそみれば悲しも

日ごとわれ蟬とることのためしさをしみみごおぼゆこの里に来て

みらばたのほりまみれの地藏尊けふ秋まつり、鶏頭花は赤し

ゆかしたにほそぼそなけるこほろぎも熱ひくければさびしくもよし

世をとほみすめばほそぼそ庭の隅ひるふかくして秋の虫なく

おほらけき青空のもといちにんの人の子やみてひすがらなやむ

ひとの子の死にゆくさまをこのもしくある日はおもふわがことのごと

葬列の村のはづれにながながとつづけるにまたなみだあたらし

おほきなるその葉にはにすつゝましき花をつけたる秋海棠はよし

なにゝても花は愛でたしやみつかれひさしく夏をこもりてをれば

くれなるのダリヤのこゝろわれもてど燃ゆるをしらすやみつかれたり

つかれたるこゝろをそつといたはりぬダリヤは赤しこもりゐて見る

くれなるのダリヤもよししづかなるアスバラもよしこもりゐるの秋

やみくらし添ひ寝をたちてひさしかる子をいとしめり夜半にめざめて

あかけれど素直にのびし吾子の髪熱ひくき日の縁にそゝへぬ

ほつほつと秋雨ににたる音をたてゝ毛虫のふんのをこめておつ

夜をよかみ毛虫のふんのおつる音耳にさからひよすがらいねす

咲きさげど眞赤なれども蔓珠沙華たゞほきはきと折らるゝばかり

道ばたに白くたけゆく蔓珠沙華あはれこの花咲き咲きたれど

崖にさけるひとかたまりの蔓珠沙華朝の光にひたぶりもゆる

蔓珠沙華かく燃えたれどおしげなく野良の歸りに踏まれてわびし

ほきはきと感じよければ蔓珠沙華あさの散歩にいつも折りたり

この朝、二丁あまりの散策にのこの喝くをおぼえがちなり

たよるべき神もまたねばこもりゐて病久しとなげかひくらす

おほらけきこのあめつちにひとりのみ病むにあらねどわびしからずや

ふりかへるはたちの春のあまりにもはるかなれどもなくよしもなし

ひだまりに薫咲きにけりげに春もめぐりくるらしやみほそるまに

つちかひし花の芽赤くふくらめど病のいゆる日はあらくや

ひごせをこもりてやめばわが頬のこけほそりしに涙はてなし

山を田を川をけむりをちつと見ておもふことなくくれたりけふも

君をしもいとしとおもひ夜すがらをいねがてにありこの心はや

一日をつとめてかへる君をだにねぎらひもえず久しく病めり

やみほそりほそりたるまゝたやすくも落つる指輪かぎわをかなしみて見つ

死なんなどおもひつゞくるこのひごろ雪ふかけれど世は春なりし

起きいでもればいとわがそばに積木をたてゝあそべるよ吾子

よくなれば動物園につれゆくときかせば父といねたり、節子

咳すればうしろにまわり春をなでるいとしきものよ五つの吾子よ

「母ちゃんよ母ちゃんはいつよくなるのか」かゝる言葉をいくたびきくぞ

文鳥の浴める音をねやぬちの日だまりにきくあしたはうれし

南天の葉のうら赤くおつる日はしみじみとして春のこゝちす

日に三度なさねばならぬ吸入のつとめのあれば春もうこまし

美しく澄めるくすりをのむこともこの春の日のつとめなるかな

つれづれの吾におくり來しブルムラの花をいとしみ友をおもへり

やむ身なれば淡く黄色きブルムラの花散れるだになげかひふかし

未だ嫁かぬ友をおもへばいねがてに夜更けわが足のしみじみ冷ゆる

一すじの黒髪のみだれ日だまりにものかく紙にゆれてうつるも

里の子らマスクをかけてわれによするそのうす笑ひさびしかはたれ

吾がまもる留守居の玻璃にいたきまでひかりて落つる冬の日輪

春なれやもの緋みをれる吾が窓にひねもすきたり小鳥はあそぶ

なもなき花

ほつほつと餌をはむ音のいとしきにあむ手をやめてしばしはきける

大正十一年三月
より十二年六月
まで徳川昭石にて

ごみだめのひだまりに咲くうすじろきなもなき花の尊きいのち

みおしへを泣きてうなづく人々をめぐらかにみぬ須彌壇のまへ

かくばかり信じられなばわれもまたやすらかならんとある日は思ふ

つみふかき女のゆえになにごともあきらめといふ母のさびしも

つみとがの女にのみにおほきてふそのみ教へにつよくさからふ

やりどころなきさみしさにみちばたの地蔵の頭をなでゝみるかな

あめつちにひとりをたのみいとつよく生くる生命のありとしりませ

あめつちにたゞいちにんをたのみゆえ女の生命かくもたふとし

つかれたる心をそつといたわりぬ子をねむらせて針はこぶとさ

かさくともめば音する掌をいとほしみつゝ氷雨をきけり

ゆきゆけど林はつきす木のかげの赤き入日に吾子はこおごる

いまはたゞおはれしごとく針はこび秋來といふにさびしくもなし

ひそく／＼と秋きたるらし吾子の手のすこしつめたし九月のある日

たえしのふ心もたねばいさかひてわびしこゝろに暮れたり今日も

いさかひは悲しとしれどたへしのふ心もたねばさらになしき

こほろぎの暮なごつくりなぐさめぬ父のことなごおもほゆるゆふべ

なにながし秋てふことにしみじみとなかれぬるかな部屋にこもれば

搖

藍

大正九年四月
上り大正十一年
三月まで空頁にて

すこやかにたゞ健やかに生まれよと日ごと夜ごとに祈るこのごろ

この朝聖母の像にぬかづきてひたに祈りぬよき子たまへと

あたらしき悲しみしりぬ新しきうれしさをしりぬ母となりし日

わが胸に吾子はぬむれどなにゆえか母らしき心地せぬが悲しき

母といふ文字さへおそれおのゝきし子なりきわれの若かりしかな

馬酔木あじぎさく如月きさらぎの日にうまれたる節子よたゞに健すこかなれよ

いごちさき乳房ちちふくませ母といふことをしみみおもふ黄昏たそがれ

ぬばたまのさ夜をむづかる子を抱きすかしかねてぞ泣く母よわれ

母の髪をかみ双手てにつかみかげばしにおどれる吾子わがこをいとしと思へり

搖籃ゆりかごに小犬こいぬをもちて眠りたる吾子わがこのひたひに午後の日はてる

ものなべてめづらかに見つ子をいだき夜の街を行く母なりわれは

子をせおひ市場の朝をいそぎけりおほかたの日はかくても過ぎし

眠らるる吾子みつむればおさなき日のわが身にもまたかへるがごとし

なにごとの望みかあらん搖籃にやすけくねむる吾子なり節子

はしきやし吾子が生れてかにかくに五十日もすぎぬすこし笑へり

柔かき四月の午後の椽側に乳のませをればねむたくなりぬ

木槿さく日ぐれのまちななきやまぬ吾子を背負いてゆきかへるかな

なき泣きてなぐさめんとするわが性をこのごろせちに寂しくおもふ

市場より買ひこし百合のあまりにも赫かりければさびしさのわく

草に伏し唱へば鹿のあゆみきてやがてまろびぬつぶら睡とちて

鹿の脊のうすあたゝかき手ざわりに涙さしぐむ夕靄のなか

公園の芝生の上をしつとりと夜露にぬれて鹿もあゆめり

醫學士にとつぎしといふふるさとの白痴の娘なれも人妻

いつになれば繪具を買ふことのできるならんけふもまた君とチューブたゝけり

夏なれや玻璃はりのうつわを今年こそ買はんといひつまたも過ぎける

きわまれるこの寂しさをやはらかくさし入る月にまろびて捨てん

心やゝうつろなりけり山にすれば枯草いまは風に伏しつゝ

こゑたてゝ子のよろこぶがうれしくておもちやの犬を泣かしてあそびぬ

やうやくに人をみわくる吾子なりき秋ふかみつゝ思ふことなし

みづからのかげにおごろきわつと泣く子をいとし思へり秋ゆく

うつゝなくこおごる吾子をいだきつゝ灯の街を今宵もゆかん

赤き數珠くちになめづり首ふりて子は喜べりみ佛のまへに

雨のおと、午後九時の汽笛、ひつそりと秋くるゆえかふとも悲しき

百千すじ櫛にあまりておつる髪に涙ぐまるゝ秋の心か

しのびやかに秋きぬ君がやみてはや二年なりけり久にあはなく

うつくしききものなど縫ひ人の子にきせて喜べり病むわが友は

ひたすらに消^けなんどぞおもふかくばかりかなしきものかいさかひし後は

この日ごろふとしたことにいさかふがひとりとなればいと悲しき

果てしなき荒野をめぐる心なりかりそめなれどいさかひし後は

つまらなきことにあらがひしふたりなりしそれがおかしくみづからわらふ

二三日いたつきたれば床のうへにしろくほこりのたまれるが憂し

おそ秋の日ざしあかるし床の上にはこりたまれるがわびしも病めば

おそ秋の夕べの室に蝶ひとつまごひてありぬいちらしく思ふ

もの書けばかたはらに來て顔をのぞき笑^{あま}ふわが子のいとほしきかな

たまさかに着物欲しなど思ふかな展覧會よりかへりてし夜

いとうすき吾子の髪の毛街ゆけばおそ秋の風にうごくよろしも

かの友も子供ほしなど云ひ來しぬ山茶花の一つさきし夕暮

あたらしく障子はりかへゆつたりと親子三人が冬をこもらむ

落日する櫻木立にしみじみと暮れゆく秋を惜しめり今日も

たまさかに本をたづさへ野にゆけば仔鹿の泣けり冬の落日

手向山みくじをひけば吉とありかゝることさへうれしかりけり

二つ三つ投げられしまゝ麩のうかぶ猿澤池の冬の夕暮

丹にのはげし大佛殿の夕まぐれあしなへ鹿のそばくかへる

よく笑あはふ友にてありきいまもなほ笑ひてありや妻つまとなりても

おほかたの友の名さへも忘れはて世にそむきゝて三年みとせとなれり

送
風
機

大正七年五月
より八月まで
日立鐵山にて

ねむられぬ夜半の枕によりそひて送風機さへしのび泣きする

夜半にふとめざめてきけばダイナマイトのとどろきわたる抗穴のあたり

むくひらるべきことのある心地する日なりふと吸ひてみし薔薇ばらの香あまし

さゝ小笹小笹のなかの簾やぶ柑子かんじその簾柑子やぶかんじにたるわが戀

もえやまぬ 薔薇 一月の小庭べにほつちりさきぬ胸もたゆたふ

鶺鴒と二羽の雀のたむれをめぐらとも見てやまひわすれぬ

病むといふことになれたるこの日ごろ人形もちてよねんはあらず

嫁ぐ日のまじかくなりて紅絹裏にかすかににじむ涙こそあれ

うたひつゝカンテラさげて氷雨するゆふべをかへる五十路 鑛夫

その鳥のほがらになきて鑛山の冬の日くれぬ文も來なくに

西京の雪の朝の停車場になみだながせし君をわすれず

袖萩の物語きなきぬれぬ雪さむざむざふりつむ夜更け

なきつかれ母の手にねし幼き日に歸へるかと思ふ雪の夕は

いつしかに心はなれし友ごちのふとも浮びてなやましき夜半

うまいせる子をひざにしてもの縫へばしのばゆるかな嫁ぐ日のまへ

雨あがり由比が濱邊に網を干す海女にかゝれる春の日たかし

掛川の家毎に柴の垣ありてあかき椿のまじりてさけり

五十日やみてあるまに女郎花河原撫子さく日となりし

ひねもすを太鼓をならし角兵獅子をまねてあそびぬ春日おだやか

小雀のたわむれをみて君まさぬ日をなぐさめぬはかなけれど

思ふことなべてわりなしひとりゐの部屋いつばいの秋のいりつ日

母の年のおひしをおもひしみじみとやさしき言ことばをかけて見しかな

さかりゐて病むてふこともしらなくに君みまかるごきく雪の夜

たちわかれひだちの國の鑛山くわんざんにさびしはたちの春を迎へり

ひんがしの鑛山町くわんざんまちにむねやみてなみだはてなく友をし思ふ

旅の子はすむむねもなきわびしさに草のいきれに死なんとおもふ

わがこゝろ流るゝ水になりたけれなべてわすれんがるゝまゝに

からすなどおり來て菓子をついはめり新しき君がおくつきのへに

あまりにもつめたくなりしわがこゝろを悲しみにけり奥津城のみまへ

あやしくも涙はつたふわがまゝなわれにしあれごみほとけのまへに

しみじみと教をきけばおろかしきこゝろかなしく涙はてなし

つゆくさのはなによくにしわがこゝろいとほしみつゝ秋とはなりぬ

なにごともたらちねの母とゆあみするほろゝ湯の香にしくものはなし

ひねもすに針はこびなばたらちねの母のこゝろもやすらかならん

山くづす四十男の口笛も夕ぐれなればなつかしきかも

ほ
こ
ね
路

大正七年九月
より九年三月
まで伊豆三島にて

母ときてのぼる箱根の石畳たかだかひやくひるさがりかな

ふりかへる峠のうへに馬子の唄とぎれてきこゆ侘びしきものかな

山躑躅折りそえ歸る草刈りの影ながながと夕日が赤く

鈴懸のはなをかざせばはらはらと散りてこぼれぬ心わりなし

夕づく日遠き牧場ゆ山羊のこゑほそぼそきこゆこゝろわびしも

鐘なれば赤き椿は落ちやまず淡き旅愁もわき出づるかな

北國の林檎いろづくころとなりてしみじみ姉のしのはるゝかな

うす青き林檎の味にしみじみと秋てふことを思へりこの朝

北國よりおくりてきたる林檎の實室一ぱいに匂ふ夕暮

あえかなる君か頬にもにたるかな北の木の實の色のよろしも

津の國の君にわかたん箱根なるまことよろしき桑の實の味

西に飛ぶ夕つげがらす病みてありと君にな告げそかりそめなれば

もの思ひ思ひつかれて仰ぐ空に夕つげがらすの羽音さびしも

罌粟の花胸をやむわが血をすひてかくも色よく燃ゆるにあらずや

わが病いさゝかいえしその日より母いたつきぬ心わりなし

あこがれをうら切られたるさびしさよ熱海の海に小石なげたり

―三首熱海に際して―

初島はすみれさく島海苔をこる海女の住む島行かまし君よ

おもひでの花にもにたる松葉草つみて峠をくだるおそあき

教室の廻轉窓に今朝もまたましろき鳩が鳴いてゐたりし

講堂の屋根にもだせる家鳩の足のあかさよ淡雪のふる

赤き鳥よきともごちとなりにけりおそあきをわがそみたりければ

南天の實をついばめる小鳥の子赤きくちばしはいとしきものかな

めとづればうす紫の着物きてコチロンまひし君のおもほゆ

何氣なくつと立ちよりし印形屋の玻璃戸の中にサフラン咲けり

自強園^{じけつえん}うらの築地にうづくまりむかし戀^{こひ}しとのたまふか君

ひたすらにわらひしのちの淋しさに唇かめば涙ながるゝ

瑠璃色の花

大正六年七月
より七年三月
まで豫州明石にて

草原に瑠璃色のはなさきにけり秋空のごと澄みてさびしく

ひとり居るこの森かげにわびしくも鈴草さけり泣けるがごとし

母子草はゝにそむきてもだふ子にしみじみかなし黄色なる花

ふたりゐてかたりつゝゐるうみぎしに夕靄こめて月見草白し

捨てかねてスケッチ帖にはさみけり死人草てふうす白き花

けふもまたもだせしまゝに暮れにけり黄昏の海邊をひとりさまよう

朝、停車場、われら歡喜と調仰に合掌の手をともにくまなん

夕の空こきみづいろのみなぎればわかれし宵のそらろ戀しも

君のたよりもたらすひとにあらねども京商人ときけばなつかし

ひたすらに母にかくれてしのびなくあかしやのかけ茶子のはなさく

はゝぎみはなにもいはすにローマ字のてがみをわれにわたしたまへり

ものいはすなみだをながすこのごろをわるき癖ぞと母ののたまふ

棍棒をとべよとふれどわがこゝろあまりに弱し空のひろごり

さらぬだにたそがれは人の戀しきに橋のたもとのきみがすがたよ

片戀の君はもあはれおくりこしこひの小匣こびをわがあげやらす

おくり來し戀のしるしのこの小匣こび開けも得やらぬわれもいとほし

讚美歌をひらけば野菊はら／＼とちりてかなしく君のおもほゆ

病みあがりさくさくとふむ砂原にさびしき藻くづを見出づるかな

さびしきはみなとの街の夕靄にきみの靴音すはれゆくとき

やむ姉の顔のあをさよけふもまた玻璃はりの小窓にゆふひは赤く

老ひし母氷わりつゝしみみと涙したまへり、ものたまはず

消けいるごと尼寺の鐘ゆふつぐる姉やむ床にほそる、晚秋おそあき

みつむれば幼き友の頬あかしくちびる赤し落日のまへ

おごそかに太陽たいやうは沈みたり金色の眞玉またまとなりて海のふかみに

なにげなく友の心をそこなひしその言の葉をさみしらにおもふ

つくえのまへに座せばいつしか涙ぐまる友とあらそひわかれたる夜は

せんなさに冷えし玻璃戸はりどにそごよれば落日は眼にするどかりしも

今日もまたたよりもなくて暮れにけりましろき雲のそのゆくへはち

なにげなくふりかへり見ればその少年もまたふりかへりわれを見てゐたり

今日もまたかの少年とゆきあへりみ名は如何に之間はまほしけれ

道とへぞ教へもくれずきよろ／＼と顔みまはせし少女は啞なり

しつとりと露をふくみし野菊なり朝の野路をわが歩みけり

秋、秋、ねむらんとして眼とすれば時雨の音と海鳴るきこゆ

逝きましゝ人をしのびて泣く君をなぐさめかねし驛のひとゝき

一二百七十五番に

廢園に今日も葉鶏頭たけたかゝくなりてそゞろに亡君をしのばゆ

バスケットの葱さげてゆく男の子赤くふくらみし素足なりけり

はりつめしこの戀心よとなればたゞしみじみと涙ながるゝ

君にあへば涙ながるゝ故わかぬなみだながるゝわれは乙女子

灯のつけば別れをつけて歸りくるこの身いとしきおとめなりけり

氣まぐれに火鉢になげし人形のふと惜しうなりてつまみあげたり

シヨークキンドにあかきマントと鳶色の帽子ならべり秋をふかみか

配達夫門にいであしわが前を大股で過ぎふりかへらざりき

その人はしらぬ顔して雑誌讀みゐたり人ちがひほごつまらなきはなし

うづくまり子雀の死をかなしみぬ一月八日、始業式の朝

濱防風つみにいでにし砂山に秘めたる涙かわらじな、いまも

十九てふ年をむかへていと赤き古き半襟えにも涙おほゆれ

いつまでもかけてをりたし赤き半襟え十九なる身のさびしまれけり

花の食事・畢・

日

記

— 拔

粹 —

大正八年

一月一日、曇、午後、雨、夜、雷、風激し。

とうとう年は新しくなつた。除夜の鐘の何といふ美しい餘韻だらう。自分が二十になつた。この肩上げさへとりたくない私が！ことごとくにみな改つた心地がする。それだのに自分のこの悲しい、淋しい生活は依然としてその舊い殻を脱することができないのだらう。

四月が来れば、花の頃になれば、こうしたたつた一つの望みがなかつたら、私はきつとこの年を呪つたであらう。ふりかへつて、昨年の日を思ひ出して見やう。お、さうだ、まだ快くなり切らぬ細い体を提げて、あの人の家をお訪ねした。三浦さんの兄様に来ていらつしやるといふことを聞き、一寸あわてたが、しかし、それはほんの乙女の感じるはにかみに過ぎなかつた。書室には新しい作がいくつとなくかけられてゐた。

今年は何といふ寂しさだらう。やたらに道を歩るきまわつても、結局うつろに似た心はみたまはしない。十字街で思ひがけなく出會つてほのかな笑ひを交すこともなければ……………。

「エルテルの悲しみ」を読む。私は頁の上に幾度か涙を落したところか。私は、ある意味で、Tとエルテルと私とロツテをむすびつけて考へさせられた。Tはエルテルのなしたやうな熱烈さをもつて居るかどうかは知らぬが……………。

私があの人のことを残らず云つてしまつたら、きつと私を憎み、あの人を呪ふだらう、それがまた當然ではあるまいか。けれども今日の日もTはいさゝかの望みによつて生きてゐる。彼も憐だ。

私はせめて、三分の一位でも愛を分けて與へることが出来るものならと思ふ。不可能なことだ。彼の不運を悲しむ。

一月八日、晴。

今日も割合に暖かだつた。南國の氣分がする。あの人から手紙が來なかつたので、落し物でもしたやうな氣がする。

明日からいやな塾生活。港の街の戀しい夜だ。「小さきものへ」をよむ。私は泣いた。何だか未來に對する暗示のやうな氣がして悲しい。

一月二十一日。

洋服を仕上げるために、一人後に残つて五分ほどして歸らうとした。戸棚の戸をあけると、本堂の方でお塞錢をまく音がした。けれども、その音はなか／＼やまぬ。ごなたか、その中のお金を出してゐらつしやるのだと、別段あやします本堂の障子をあけた。

一人の頬かぶりをした男が、あみだ様の前に立つてゐた。私は思はずおじぎをした向ふもうなづいた。ふつと下を見ると、お塞錢が一面にまきちらしてある。あやしいなご、も一度その人の顔を見上げると、まつくろい顔に龍の眼が私をのまふとする勢。

あゝ、ごろぼうだ！ 私はかけ下りた。「先生本堂へごろぼうが、」こりや誰だまで！」といふ間に、くだんの男は墓場の竹藪へ逃げ下りた。「こりやまで！」この聲に男はふり返つて氣味わるい笑ひ——、冷笑とも、うらみとも、つかぬ眼をむけて再び走り去つた。私は少しふるへだした。泥棒におじぎをしたことが、恥しいやうな、口惜いやうな、また間ぬけた仕業のやうな、なんともつかぬ感情が入りみだれて働いた。私が障子をあげた時に、むけた眼のすこかつたこと！ 生れてはじめて、泥棒の顔を見た。眼の色、着物の破れが目にもちら／＼して氣味がわるい。歸つたら、あの人から明石のお里が焼けたと知らせて來てゐた。

一月卅日、雪。

昨夜、寝がけに、明日は雪が降るよ、と母様がおつしやつた、朝になつて雨戸をくりあげた、あゝ、うれしいと叫ばざるを得なかつた。椽がはへ出て、「雪よりも雪よりも白くしたまへ君のみめぐみに、——を大聲でつゞけさまにうたつた。

塾へゆく道で、ころげた子を抱きおこしてやつたり、下駄についた雪をとつてやつたりしたことを私はうれしく思ふ。ふじ様とたまき様とが手拭を冠つて雪かきをして居た姿など、實際見事だつた。夜になつてもやみさうにない。私はあの人の手紙をじつと抱いて床についた。

二月八日。（但馬八鹿にて）

五時過ぎ京都についた。あの人が出て居てくださして私はどんなにうれしかつたことか！。百幾十日目の目もち、人目がなかつたらあの人胸に飛びついて思ふ様泣き度いものを！。私は何も云へなかつた。何といふあつけない、ものたりない、しかしうれしい時だつたらう。

八時に山陰線にのりかへて、雪また雪のトンネルを通りぬけ、八鹿へついた。

岸本のかちやんが、迎ひに出てゐて大分熱がさがりましたと聞きうれしかつた。

霰交りの雪の中を家についた。

お姉様は、ほんとに元氣になつてらした。

三月十二日、雨。(但馬入鹿にて)

今朝はじめてむかひの山あひから鶯の聲がもれた。寒い冬から春へ時は歩みはじめたのだ。その間に、私は何をした事だらう、かはいさうな自分よ！。風のふく日も雨のふる夜半も、四月からの京生活を思へばこそじつとかみしめてゐた。それを、いま新しい障害のために、破壊されやうとして居る。それを知つて居ながら、不可抗力で引きづられるみじめさ。

それにしても、なぜあの人から便りがないのかしら、私はこんなに昨日も今日もまつたのに。

千鳥の聲をはじめてきく。何とも云へぬ悲しい、もの狂はしい聲だ。

九月一日、晴。

一日熱があつた。

夕方、秋らしい風が吹く。来るべき日が来たのだ。これで、しばらくの別れかと思へば、夕食はわけてもまづい。私はスケッチ箱をもつて驛へ行く。

富士がくつきりと美しい。流れ落ちるまゝに、涙もふかず……別れてしまった。夢ははかなく悲しい。

大正十年

二月八日。

午前十一時ごろ節子が生れた。

はじめて味つた生みの苦しみ、母といふよろこび、それはとても云ひ得る範圍のものでない。

二月十五日。

節子の頬がだん／＼ふくらんで来た。紅梅のつばみも笑ひかけた。日は幸福な色をしてかゝやいてゐる。

今朝がた節子のほその緒がどれた。

明石の母様が、御歸りになつて、家の中がまた淋しうなつた。

三月十九日。

節ちゃん、昨夕はほんとにすまなかつたね。

ねむいからつて、お乳をろく／＼のまさないで、泣いてもすましこんでねてしまつたりして、おまへのお母さまはほんとになまげものね。

でも、節ちゃん、お前が決してに／＼いからじやあないの。母様は、おまへを育て、ゆ／＼にはあまりに子供供してゐるのだから。

あゝまに／＼と、何故あんなに／＼この物から、神様のやうな子を吐つたかしら、か

あいさうに、さいつも思ふの。

そして、おまへが、お染形のふとんにねむつてゐるまゝの姿を見て、涙ぐましくなつてしまふ。

けふはよいお天気ね、おまへをつれて、春日野を散歩してみたいと思ふけれど、お前はまた小さくて風邪でも引くと大變だから、もつと／＼暖くなつたら毎日つれて行つてあげやうね。

けふ雨の方で、うぐゑすが、おぼつかないけれど、鳴いてゐた。お前にはまだ聞こえなからうが、かあいいこを出すのよ。

六月廿八日。

ハイモニカを吹いてやれば、両手をひろげて、口をち／＼さきながら、節子は喜んでゐる。伸びてゆくもの、尊さ！

大正十一年

九月廿八日。(節子生後一年八ヶ月)

マチあつてこい、ひとあつてつこい、「コドモノクニ」の、まりがかいてあるところを出して首をふりながら、云つてゐるかと思ふと、今度は音譜をみて、

ちやアちゃん(母ちゃん)ドレミアドレミアと、同じ様な聲を出して、オルガンでも引く様なまねをしてうたふ。

きのふからそこいらにある、じゆばんや、ふとんをもつてきて、人形にさせて、ねんねんをうたつてやつて、よろこんでゐる。きものをさせるのを手つだつてやらうものなら、大變にかんしやくを立て、なかくさかぬ。

壁へでも、また土の上にも、石や、竹きれ、えんびつ、何でもそこらにころがつてゐるものをもつて来て、圖をかいたり、棒を引いたりして、ちやアちゃん、おうね(ふね)ギフチンコ、ちや(汽車)だと、引つぱりにきて、連れてゆき、お、い、

おふね、きしやね、上手ね、どいつてやると、さもまんぞくしたやうに、大きくうなづき、もつちく(もつこ)と、せびく(せみ)だの、きんとをかいて、一時間位遊ぶやうになつた。

かくものゝない時は、指さきに、つばをつけて書いてゐるのをみうける。

十月五日。

郵便が来たからお手紙をとつてきて頂戴といつたら、玄關へ行つてハガキをとつてきてくれた。

糸を巻くとき、かけてゐてくれるし、ほんの一寸だが、用を達するやうになつてうれしい。

よくものを云つたり、笑つたりするのでお湯屋のおじい様が、いつでも相手にしておじい様自身が、うつゝなくよろこんでゐる。本をみせても、五分通りは何だといふことがわかり出した。

夜は三人でおどるまねをして遊ぶ。

大正十三年

五月十三日。

行くなど云はれてゐるところへ行つて、どこへ行つたか問ふと、お使ひにと、節子が答へたので、はや、こんな人の心を見ぬくうそを云ふやうになつたのかと、子供の心の伸びやすいといふのか、大人つぼくなつたのに両親とも舌をまいた。

いまからこんなだつたら、このさきどうして育くまふかと、母親らしい心配と、そして自分の教育のいたらぬ責任とに涙が出る。うそをいふことのいけないことを、こんくんと云つてきかす。今夜は大分消氣て歌もうたはず、チョコレートを少し食べてねてしまつた。

ねがほの何と美しいこと。このねがほで、すべては償はれてまだあまると思つた。

節子の童謡

うちの父さま

うちの父さま

いつでも

道をかいたり

木をかいたり

おうちをかいたり

せつ子かいたり

してゐます

おほしさま

おほしさまビーカー

ビカリ光つてる

父ちやまかへりが
おゝそいな

おなか

ごはんたんごたべたので
せつ子のおながが
きんぎよのやうになつて
しようがない
もつとちつちやくなつてくれ

文鳥

くろいぼうしに

白いネクタイむすんで

おくちごあんよに紅だにつけて

二人そろつて

かごの中をおさんぼしてゐる

おやつ

時計のおちさん

ボン〜〜

なつてちようだい

そしたら母ちやんが

おかしくれるから

六月一日。

まゝごとをして、人にごはんや、お茶をすゝめるのに興味を覚えるらしく、しきりにお盆の上に、草や、花をのせてくる。

ありが度う、と云へばいゝえ、どうぞよろしく召し上つて頂戴、なんて云ふやうにな

つた。

十月十五日。

快晴。秋日和を一日の行樂も得しない身だけれど、ほかほかとした日ざしに、椽に出て柴栗のゆでたのを節子と二人で食べて文鳥のチョークの聲をきいてゐると、無上に生きて居ることが嬉しい。

やつぱりなんとかして、きばつて生き通さねばならぬと感ずる。

鈴が落葉を掃く音のきこえるのも、山の家のよきの一つだ。

けふは鼻の奥がかゆいやうな、痛いやうな氣がするけれど、ほか、別に氣分にさわりなくて氣持良し。

十月十九日、雨。

サフランの芽四つ完全、イキシヤ五つ完全、アネモネ二つ、チエーリップと水仙及びヒヤシンスはまだ上へ出ない。

とにかく自分のおろしたものがかあい、芽を出さざいふことは、樂しみなものだ。熱、七度五分、午後、氣分少しわるかつたが大したこともなく、夕食は近頃になく美味しく多量に攝る。心やうやく和む。食後、節子は「エドモアサヒ」を前に立て、ピアノを引き即興詩をうたふ。氣々にのんびりと聞く。

今夜、お芝居にておかへりがおそいので寝しい。吸入してぬる。

聖がふる襟に光つて、夜風がつめたい。

明日はいゝ田和らしい。

大正十四年

一月一日。——九日。

舊年、廿九日より發熱。かなりの高熱が三四日続く。肺炎と診断されて、一寸うろたへる。その上、川口氏のあわて方、一かたならず、酸素吸入だとか、親類へ知らせとか、

看護婦を迎へどか、大變におつしやる。

明石より母上、平野をば上に來て頂く。東京の母上にも、三日、打電して來て貰ひ、看護人も入れた。

和田さんには新年早々、夜晝の看護をさせて、大變すまなく思ふ。この方の厚意は、なんといつて禮をのべていゝやら全く無言の中に感謝してゐる。

古家にも随分、心勞身勞をかけてすまなく思ふ。四日、四夜の徹夜と、日々の挿書とで、どんなに苦勞だつた事かと、氣の毒でならぬ。ほんごに手當の早かつたおかげで、うそのやうに早くよくなつて、發病この方二週間で、かうして起きてゐられることを、神様に、自分の良人に、和田氏に、先づ感謝してやまぬ。正月早々、方々を騒がしたけれど、命拾ひしたことは、何より、何より、うれしく感謝の外はない。

一月二十五日。

すがれる神を見出さう。永久にさめないひろい／＼愛の力によりすがらう。このな

やむたましひだけは、救つてやらねばならぬと、強く心に叫んだ。

五月廿日。

自分は病弱の上、何らの天分もない身体でも、二人を幸福にするために、一生懸命、病を養つて、暗い氣分を一掃してしまはねばならぬ。

紅雀が、チー／＼となく。

カーネーションが夕闇に光る。ポプラの若葉がゆれる。

大正十五年

四月廿七日。

手術台にのぼつた自分は、天井をみつめてゐた。四肢のふるへを感じ乍ら、「痛い事はないでせう、たゞ何となく下腹が氣持ちわるいだけで、もうすぐです。」と院長様はぐん／＼とメスを動かしてゐる。

神様、あなたのみ心のまゝになさしめ給へ。私はこの時初めて、うつろな心になつて神の力を求めた、こいふより願つた。そして祈り乍ら、眼じりに熱いものが傳はつてゐるのを感じた。

かなり痛い注射を、もゝにして貰つて、たんか車にのせられた時、流石にぼつうとなつた。

室にかへつて床にねかされた。

耳もどで、ごうだつたと、夫のこゑがした。

私はうれしかつた。しかし、舌がけいれんしたやうで、ものがいへぬ。

二十分位ではつきりとなつた。夫は更に痛かつたかときいて下すつた。うなづかうとするより先に、私は泣いてゐる自分を見出した。

——これで私の第二の妊娠は終つた。

六月廿四日。

朝からまた憂鬱にとらはれる。

夕方、節子を連れて散歩にゆく。かへりには大きいお月様が出てゐた。

「お夕飯をたべてゐたら、節子がしく／＼泣いて歸つてくるから、ごうしたさきくと、今ね、道で、松葉杖ついた人が汚れたきものをきて、電車の方へ行くのに逢つたの、その人はきつとお家がないのだらう、それで可愛さうで寂しい、」と云つて泣く。病人に對して、それはごするごい神経が働くのか、私の病氣がしらす／＼幼い子の頭に、それ程喰ひ入つてゐるのかと思ふと、抱きしめて、つひ自分も泣けてしまふ。

そして、先刻まで生きてゆく、健康にならうとする努力を無視した自分が、たまらなく恥じられる。自分は本當にこんな弱い肉体をもつて、生きてゐても死んでも同じだと思ふけれど……………。

朝食をどらぬ朝など枕邊に座つて、

「母ちゃん、ごはんだべんと死ぬよ、たべなさいな、」と、いつて自分も箸を取らうとしな

い。

仕方なく、一寸でも食事をしてやると、よみこんで自分も朝食をして幼稚園へ出かける。

「母ちゃんは弱いから」と、座ぶとんを持つて来たり、すいぶん子供ながらに、氣を配つてくれる。

節子のためにのみでも、私は健康にならねばすまぬ。自分の果せぬつとめを、第二の自己によつて果させやう。こう思つて床からぬけて、おとなしくねてゐる節子の手を握り、頬をなで、いとしいねがほに、たのんだり、祈つたりした。

十月十八日。

午前一時頃より、少しけいれんをしばらくしたので、トンブクをのむ。

頭痛やその他で五時迄に二度目がさめ、さめる度に胃が痛むので壓へてもらふ。六時、床の上へおき上り、一寸咳と胃痛になやむ。

午前中は、わりあひに痛みが少く、うれしかつたが、午後より、また激痛があり悲しいやら、腹立たしいやら、たまらぬのに、お祭りの大鼓がこの道までねつて来て、その音がまたおなかのそこへ、しみ込んでよけい苦しい。

先生のいらつしやるのを、千秋の思ひで待つ。先生のおかほをみて、ほつとはしたものの、痛みは止まらず苦しむ。

明日よりの食事のこんだてを、私のために、わざ／＼してくだすつた。夜はどんぶくのおかげで、割合によくねむる。

十月十九日。

二三次痛んで、五時床の上におきる。

朝食。重湯、一半、

野菜スープ（ホーレン草）一、むめぼし ¼、重曹 五十瓦、

古家筆子略年譜

明治三十二年 一歳

明治三十二年十二月十七日午後一時二十分、兵庫縣美方郡兎塚村福岡村七十一番屋敷に生る。玉河信齋の四女、父信齋 四十三歳。母すみ 四十一歳

明治三十七年 六歳

父、神出尋常高等小學校長に奉職のために、従ひて兵庫縣明石郡神出村に移る。

明治三十九年 八歳

四月、神出尋常高等小學校に入學。

明治四十二年 十一歳

六月、父信齋を失ふ。

明治四十五年 十四歳

神出尋常高等小學校尋常科を卒業し、高等科一年に入學。

大正二年 十五歳

四月、兵庫縣明石町に移り、明石尋常高等小學校高等科二年に入學。

大正三年 十六歳

三月、高等科を卒業し、四月神戸市立高等女學校に入學す。

大正五年 十八歳

古家 新と知る。

大正七年 二十歳

三月、神戸市立高等女學校を卒業し、母と共に伊豆三島に移る。五月、茨城縣日立鑛山の兄のもとに遊び、八月まで滞在す。三島に歸りて三島家政女塾に入學。

大正八年 二十一歳

二月、母と共に姉の病を見舞ふべく兵庫縣八鹿町に行く。三月、三島家政女塾を卒業。

大正九年 二十二歳

四月、古家新と結婚す。

直ちに母をともなひて奈良に、居住す。

大正十年 二十三歳

二月、長女節子生る。

大正十一年 二十四歳

三月、兵庫縣明石市に移り住む。

大正十二年 二十五歳

六月、兵庫縣寶塚に居を移す。

大正十四年 二十七歳

三月、大阪府池田町に移る。

大正十五年 二十八歳

十月二十三日午前二時四十分、病革りて、池田町室町の自宅にて死去。二十四日、佛式を以て葬送す。

筆子さんの臨終

僕は四通の至急電報を打つて古家の家へかけつけた。

まったく古家の言葉どほりである。悲哀の幔幕は一さいをかこんでしまつてゐた。

僕はハッとしたが、何をいふこともできない。

副院長が枕頭に脈をとりつゝあつた。副院長は病人に向つて「最期まで戦つて下さい」といふことを度々いつた。

副院長は、筆子さんのかねてからの約束によつて、二時間もまへに「もしかすると今度は駄目かも知れないが最期まで戦ひませう。」といひ渡してゐるのだ。筆子さんは心靜かにこれをうなづき、ニッコリと笑つたさうだ。注射する時にもよく僕はこの言葉を聞き、靜かに微笑む筆子さんを度々見た。なんといふ尊くも死に安んずる心！

しかし僕は淋しくてしかたがなかつた。

そこへ電話をかけた院長が大阪からみえた。

明石のお母さまも見えた。

別府さん母子もかけつけて来た。辻村の奥さんもまめくしく働いてくださつてゐた。

そこに集つたみなは、いざといへば、どんなことでも手助けしやうとする人達であつた。

「院長が見えました。」といふ聲に筆子さんはハッキリ目をあけてニッコリと笑つた。しばらくして院長は病院へかへられた。僕はお伴をして、その夜から朝にかけて必要な薬品。それはもう筆子さんの生命は朝まで保てないその用意のためのものなのだ。をいたゞきに行つた。

僕は胸がはりさけるほど、醫師達にすがりたかつた。もう少し、もう少し、生かしてほしい、せめて令兄の見えるときまで、とすがりたかつた。しかし、どうすることもできないこの近づいた、悲しい宿命に、黙々と裏門から病院に入つた。病院の庭に立つて大空を見上げて待つ間、僕は古家の心のうちを思つて祈つた。星はきら／＼美

しく輝いてゐるのだ。看護婦は、薬をわたしてくれた。その薬はほしくない。それはもう薬ではない。僕はどぼ／＼と室町の二階へもどつて来た。

一同は、静かに病人の周囲をとりまいて、その澄んだ筆子さんの顔を不安らしくみつめてゐた。それ以外どうする術もないのだ。

突然、筆子さんは、ポツカリとその眼を開いた。

「みんなこゝにゐますよわかりますか。」

と誰かゝきいた。

「よくわかります、みんな泣いてはいけません。わたしはよろこんで逝きます。」

「あとをたのみます、わたしはみなさんに感謝してゐます。ほんごにありがたう。

みんなさようなら。」

そのハッキリとした聲、それは後三時間の生命しか與へられない人間の力である。誰が思ふか！ 僕達はその眼をみつめた。苦しうである、そして信仰によつてその苦しみに耐えてゐられる有様はみな涙をさそはずにはゐられない。

注射は無数に行はれた。時には三本もつゞけて——悲壯な、死のまへに僕は頭をあげ得なかつた。生と死のこの戦ひ、蒼白な焰の劍、それが一直線に刺すのだ。おゝ神よ！ もう駄目か！

その時筆子さんの美しい聲だ。

歌だ！ 聖歌だ！ 主よ、主よ、僕はひざまづく、

主よみもとに近づかん

のぼる道は十字架に

ありともなご悲しむべき

主よみもとに近づかん

「みんなみんなさようなら………」

この聲に、こゝに居た人々は只感に打たれ、涙さへ止みて、その清純な死に勝る尊

さに聴きとれたのである。

筆子さんは、もう手をあげて、苦しみと闘ふやうな姿勢はとらなくなつた。

静かに、静かに、召されてゆく御聲を待つてゐられるかのごとく、やすく／＼としてゐられた。

遂に、手は挙げられた！。指は組みあわせられた。

あゝ魂はゆく、魂はゆく、魂はゆく、

遠く、遠く、今ゆく、さらば、さらば。

大正十五年十月二十三日、曉、二時四十分。筆子さんは愛する人々に手をこられ、あたゝかいたくさんの涙に見まもられつゝ、あこがれの旅に逝つた。

(小村直記)

卷 末 に

短歌は筆子のながい病床生活の、たゞひとつのはかないいとなみでした。

折にふれ、浮ぶがまゝに、手あたり次第そこらにあるノート、紙片などに、書きつけてゐたものを、まとめると五百首近くにのぼります。そのうちから、また手あたり次第に三百餘首をまとめてみました。そして、その配列は、この集では特に製作順の逆にしました。

筆子の歌が、現在の歌壇のある標準にまで達してゐるか、どうかといふことはこゝでは問題ではありません。たゞ、彼女の生活が赤裸々に流れ出てゐるといふ一事のみで、私はこの集をまとめることにしました。

これによつて生前に、親しくしてゐたやいなみなさまが、ときどき彼女を追想してくださいるならば、筆子は勿論私にとつても、この上の満足はありません。

日記はほんの一部の抜粹にとゞめておきました。これにも貧しいながら、弱いな

がら、生きんとしてなやんでゐた彼女らしい心のうつり變りが幾分うかゞへること
信じます。

すべてが追想のためのこの集です。

ほんとに筆子はみなさまに愛されつゝ死んでゆきました。

しかも彼女のもつともすきな秋の日のあけがたに――。

筆子のうつろは、彼女がつねづねの言葉にしたがつて咲き亂れた秋の草花をもつ
てうづめました。そして私の友達、―― とりもなほさず、彼女のよき友らの手
によつて清いとむらいが營まれました。

私はみなさまからよせられた御厚情に對して心から感謝いたします。

大正十五年秋

古 家 新

大正十五年十二月七日印行
大正十五年十二月十五日發行

著者 古家筆子

發行兼
編輯人 古家新

大坂市東區船場町
番町二番丁八百八十九番地

印刷入 市川徳次

神戶市北區築港四丁目八一

〔非賣品〕

終

